ドクター板東の メディカルリサーチ Vol.70

～生命を 助ける医師と 外交官～

http://hb8.seikyou.ne.jp/home/pianomed/

わが国の医療で、プライマリ・ケア（PC）医学や地域医療、家庭医学の重要性が久しく唱えられてきた。これらの基盤となるのが日本PC連合学会であり、東日本大震災に際しても直ちに救援チームを派遣。迅速で継続的、柔軟で協力的な対応が高く評価され、日本財団やユネスコからも大きな援助が行われ、さらに活動が継続している。

PCにおける国際的な医学会が世界家庭医学会（略称WONCA）だ。今回ヨーロッパWONCAがポーランドで開催された。筆者は学会発表に加え、博物館などを訪問し、同国の歴史や文化を学ぶ機会を得たので、紹介したい。

ポーランド

ポーランドは東欧にあり、国名はpole（草原）のland（土地）に由来するという。地図をみると、西にドイツ、東にロシア、北にリトアニアが位置している（図1）。地理的な条件に第二次世界大戦の勃発が加わり、苦難の時代が続いてきたといえよう。首都ワルシャワは英語ではWarsaw、ポーランド語ではWarszawaと綴られる。

図1

図2

国際空港から20分でワルシャワ中央駅に到着。国際会議場は駅から10分程度の距離にあり（図2）、市内4カ所から会場へシャトルバスが巡回していた。

世界家庭医学会

今回のテーマは「家庭医療～実践、科学、芸術」であり、幅広いテーマで含むものだった。教育講演では各国のPC医療の特徴が比較検討されて、論じられていた（図3）。

演題数については、口演が364題、ポスターが480題と、数多くの発表がみられた。私は今回のテーマに関わる音楽療法に関して発表を行った（図4）。

図3

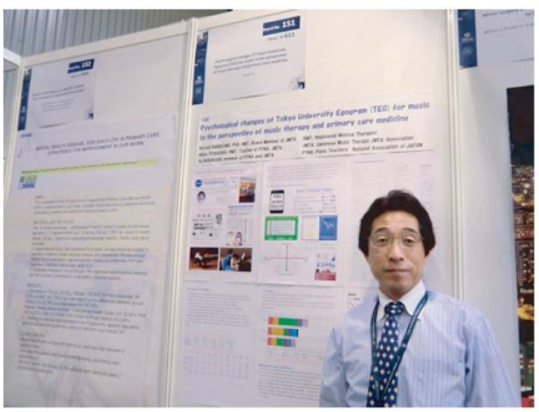

図4

ショパンの国

同国の国際空港は「フレデリック・ショパン空港」と名付けられている。ポーランドといえば世界中の誰もが有名なショパンを連想する。昨年は生誕200年となり、世界中で様々なイベントが開催された。

学会場から出発する市内ツアーに参加し、同国の歴史や文化に触れる機会を得た。その中で、憩いの公園の中にあるショパン像を訪れたときのこと。すでに

数多くの書籍でこの像をみたことがあるが、目の当たりにして、その大きさにびっくり。というのは、書籍の写真には、傍らに人物像が一緒に写っていないことが挙げられよう（図５）。

ショパンは愛国主義者で、同国の知識階級の人々と深い付き合いがみられた。ロシアがポーランドに侵攻する直前には、彼は命をかけて闘うと宣言することに。しかし、仲間たちは、天才の命・人類の宝を助けるため、無理に彼を国外に避難させたというエピソードが知られている。

そのとき、ショパンが祖国を思い激情にかられて作曲したのが「革命」である。

図５

自筆の楽譜をショパン博物館で見つけた（図６）。まるで、ショパンの心の情熱が伝わってくるかのような筆致であった。

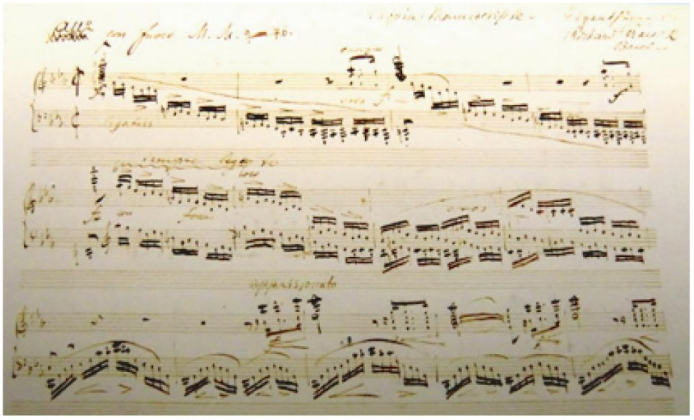
図６

歴史を紐解く映画

歴史を振り返ると、ショパンが生まれたポーランドは長年にわたり何度も他国に分割され統治されるなど、難渋の歴史を有する。１９３９年９月には、ドイツとソ連によるポーランド侵攻から第二次世界大戦に拡大していったのだ。

その後、同国では尋常でない事態が引き起こされるが、これらに関して映画が理解の一助となると思われる。

図８

まず「戦場のピアニスト」（原題 the Pianist, ２００２）を紹介したい。ポーランド侵攻後、ワルシャワの廃墟で生き抜いたピアニスト、シュピルマンの体験記が語られる。

図７

原作は、戦争直後１９４６年に刊行された。しかし、様々な妨害が続き、ようやく復刊できたのは、独訳版が１９９８年、英訳版が１９９９年。映画の中で象徴的に使われたショパンの夜想曲も知られるようになった（図７、８）。

人々の命を救う

引き続いて、スピルバーグ監督による「シンドラーのリスト（Schindler's List１９９３）」を挙げたい。ドイツ人実業家オスカー・シンドラーが１,１００人以上のユダヤ人の命を救った実話を描いたものである。私もこの映画を観たとき、同監督が従来と全く異なる領域に踏み込んだことに驚いたことを思い出す。

実は、シンドラー伝説と似たエピソードが我が国にもみられた。外交官・杉原千畝（ちうね、１９００-１９８６）の存在である。

彼は、第二次世界大戦の際、リトアニアの領事館に赴任。ポーランドなど欧州各地から逃れてきた難民に通過査証（ビザ）を発給し、約六千人を救った。そのため「日本のシンドラー」と呼ばれることに。ただ、外務省の訓命への違反が問題となり、日本では最近ようやく再評価され、名誉回復がなされたばかりだ（図９、10）。

図９

図10

実は、今回ポーランドの学会で、同国の医師から私に「Sugihara と日本への感謝の意」が伝えられた。偶然か必然か、いずれにせよ、私の使命として、ＰＣ医と同様に外交官による救命の歴史を少し紹介しお伝えさせて頂いたものである。

（板東浩、ばんどうひろし、医学博士、糖尿病専門医、ピアニスト）